

人、自然、アートと街をつなぐ

左京変人図鑑

左京区に関わる
素敵な変人インタビュー

京都精華大学前学長
博士（工学）
ウスビサコ氏

2022

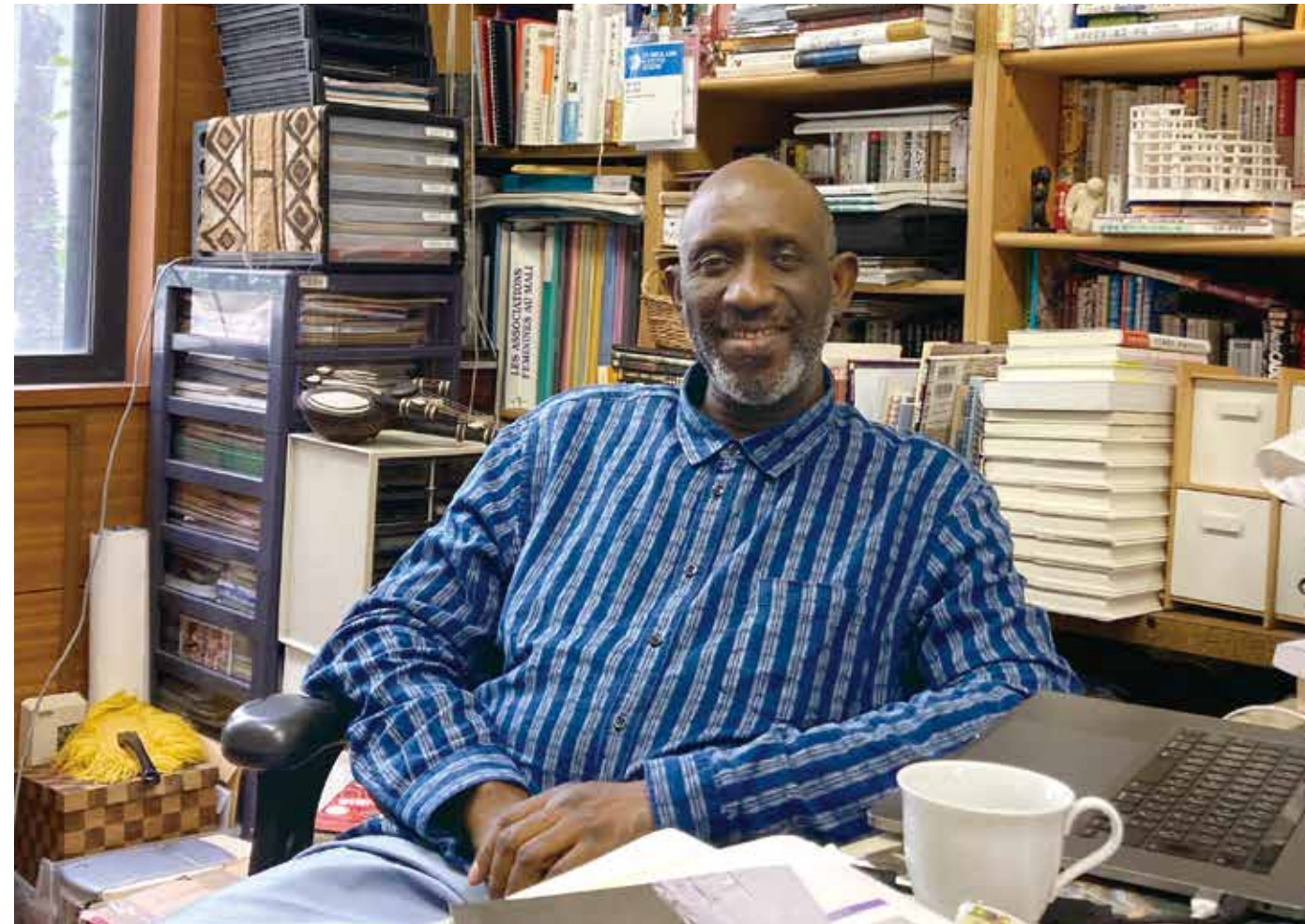
8

Vol.1

FREE

日本人の心を開いてきた変人

日本人の心を、 開いてきた変人。



プロフィール
京都精華大学 前学長・博士(工学) **ウスビ サコ**

日本初のアフリカ出身の学長となったウスビ・サコ氏。京都精華大学の学長任期を終え人間環境デザインプログラム教授として同大学に残り、学生たちに慕われています。「変人」の魅力とは、自分らしさ。「左京変人図鑑」創刊号では、サコさんに京都での学生時代のエピソードについて、また、没個性となりがち日本人について伺いました。

自分らしく生きることとは、本来難しくくない!?

— 京都大学大学院に入ったのが京都在住のきっかけだそうですね。そうですね。大学院に入る前に研究生として京都に来ました。研究生は、授業の義務もなく、居場所がなかなか作りにくいんです。ゼミのある日は大学、それ以外は、自分の研究の準備をしたり、誘われてる研究を手伝ったり、セミナーや講演会に行くという感じでした。修学院にある京都大学国際交流会館という寮に住んでいました。目の前の「[SPEAK EASY]」というカフェに、フレックファストというコーヒー付きのメニューがあるんです。朝ごはんという名前なのに9〜17時までで、コーヒーがおかわり自由。日本ではめずらしいですね。だれもが自由にそこにいられるような空間で、カフェを好きになったのはここがきっかけです。朝は一旦、SPEAK EASYに行って、考えてから動くという毎日でした。

— 一年後、寮を出て、そこから日本社会に対する見方が変わっていききました。季節的にも転居先が見つからず、敷金礼金なんて貯めてもらって、北区の着物の帯の絵を描いている方のアトリエの1階を貸してもらえることになりました。そこで私はパーティーを始めました。すると、大家の佐々木さんが「僕の自宅であったら」と言ってくれたので、毎週、10〜20人くらいを佐々木さんに連れていくというのを始めたんです(笑)。— 日本人ってパーティーに慣れていない気がしますが。その説は疑問です。みんな普通に来るし、開催しないと「今日しないの?」と訊きにくる。きっと、日本人はパーティーが好きなんです。不思議なのが、自分の家に招いてパーティーをしないのに、パーティーに呼ばば来る。参加していたメンバーは今では京大の教授など立派になっています(笑)。— パーティーをしたのは、マリの中庭文化の影響もありますか? 中庭文化でしょうね。もてなすこと自体に抵抗がない。私にとっでは、食事どころかの店に行くほうがリラックスできない。自分の家だと好きな料理を作れるし、時間の制限もない。だからみんなも長居するのかもしれないね。

— 一年半後に、左京区に戻ってきました。2DKのマンションでしたが、「みんな今日ごはんどうする?」「サコの家にこうや」と、お鍋などの材料を買って持ち寄ってくるんです。もう結婚してたんですが、妻が会社勤めから帰ると、大勢でご飯を食べ始めていて、みんなに「食べる?」と訊かれていました。人数が多いときには鴨川に出ていました。鴨川は庭のようなものです(笑)。— 中国、日本とアジアで暮らしてきて「自分らしく生きる」を意識したきっかけはありましたか? 最初は日本語をきちんと勉強して、日本文化を学ぼうとしました。日本化を図ろうとしたんですね。留学生は同化を試みるものなんです。でも、同化してしまうと本当の自分が消えて、日本社会になにも提供することができない。役に立つには、私が私であることが重要で、そこからお互いに学び合えるはずだと考えました。私じやなければ、パーティーのような機会を提供できない、これも些細なコントリビューション(貢献)ではないかと考えました。研究室を離れてパーティーしたら、みんな親しく話せる。そして、研究室に戻ったら前よりもっと仲良くなる。それで、「一生命コミニケーションの場を提供してきました。パーティーに来た人にはマリの写真を見せたり、マリでなが当たり前かを話したりしました。おもしろかったのが、私が結婚することを先生に報告したとき「間に合うか?」と訊かれたんですよ。「なにが間に合うの?」と答えたら、「精算、間に合うか?」「サコさんの家に女がいっぱいいると聞いている」と先生が言う。研究生

仲間たちは、サコは出逢いが狙いでパーティーをしていると思っていたんですね。きっと、なにか「目的」が欲しいんですね。後から気づいたんですが、日本人は「違う属性」の人たちで集まることあまりないんですよ。私は、バイト先の英会話教室、交流会、サッカーなどで出会った、いろいろな人を誘っていたので、それが不思議だったみたいです。— 日本人は属性がわかっていないと不安なんじゃないか。そう。だから「サコが狙ってる女」ということになる(笑)。— 日本人は自分らしく生きるのは苦手と感じますか? 自分らしく生きることは、本来、難しいことではないはずなんです。でも、日本では自分のエゴを出してはいけない、人のエゴを知っちゃいけないと抑制する。本当は知りたくせに(笑)。結局、「周囲に期待されている自分」しか出さない。期待されるキャラクターを演じ続けるのが、日本社会での生き方なんじゃないか。本来、最初から「私はこんな感じ」と自分を出して、それを理解してもらったら生きやすい。それで、私は自分を出していききました。だから、みんな私のパーティーの「場」が好きだったんでしょうね。マリでも集団によって期待され

る役割が異なる。例えば、民族の中で立ち位置、家族の中の立場などいろいろあります。ただ、自分というものを持っているからこそ、そういった異なる立場に対応できます。マルチフレームに対応するには、自分を認識できていなければならぬ。昔は「通過儀礼」があり、10代で成人として認識させられ「自分とはなにか」と考え、責任を持って行動するようになっていった。日本では、だれも大人としての自覚を認識せよとうとしない。大人の自分を求められないなかで「自分」を模索するのは難しい。自分の立ち位置がわからないのに「あなたの生きたいように生きたらいいよ」と言われても、ガイドラインがないし、自分も基準を作れない。だから苦しいのではないのでしょうか。子どもたちは、親に自分たちの目線で話してほしいと思っている。でも、大人は成功体験を話す。いっぱい失敗をしてきたからこそ、今の自分がいるのに、それを表に出さない。それを見て若者が学ぶと思いついてるけれど、美化されたものには、学ぶところがないんです。若い人たちは就活での苦い経験や悩みを話したい。でも、「就職活動がうまくいっていない自分」しか、大人に求められていない気がする。だから、話せない。

※サコさんの故郷マリでは30〜40人の大家族で共に暮らす。中庭を取り囲むように部屋が配置された住居で、中庭は共用スペースで変幻自在。調理場や食事の場になったり、子どもたちが遊んだり人が集う

のか。自分の生まれ育ってきた地域、家族や身近な人との関係性に、やっと振り向いてきた。なるほど。「自分らしさ」は、地元や家族などいわゆる「地縁」に大きく影響しているということなんじゃないか。そうす。再び、地縁が見直されているのではないのでしょうか。昔は、地縁、イコール「干渉」と思われていました。でも、地縁や血縁など、本来の共同体の基本形態こそが大切なんです。とはいえ、昔のように戻ることはありません。地縁・血縁の人と関わるけれど、自分の個人のスペースは保ちながら、みんなの存在は感じていたいという感じですか。それで、いまは「響き合う」という言葉が使われています。共感よりも響き合うことが重要になってきた。レゾナンスと言われていますが、「響き合う社会」になっていくのではないのでしょうか。みなさん自由を語りますが、みんなが響き合うなかで、自分が何者かを知りつつ、自分を受け入れ他人を受け入れていく、そういった物事を選択する可能性のことを自由と言うのだと思います。奔放に好き勝手することが自由ではないんです。

——「ほぼ単一民族」という日本人の認識と関係していると思いますが、個々人で考えは違はずなのに「同じ日本人だからわかるはず」と思う人が多いように思います。日本人が「自分」のことをわからない理由は何ですか？ 「単一民族」というのは、ご存知のように幻の言葉なんです。ないにあると思込んでいます。簡単にいうと、日本人は「日本人」というものを作り上げています。個々人が全然違うのに、単一民族だからとまとめるのは疑問です。これは本当に教育の問題だと思います。話は「管理」に戻りますが、同じ「日本人」にしたほうが、管理はしやすくなる。日本の教育は「日本人」を作るシステム。テンプレート化された教育制度によって、日本人が作られています。例えば、保育園で連絡ノートに書く「昨日食べたもの」は、味噌汁とご飯など、同じものを求められる。学校に入ったら入ったで、みんな同じことをして、同じものを持つ。学校という場によって、画一化が加速する。就学率が高いことも関係あるでしょうね。マリのように識字率や就学率が低いところは、学校の尻にはまららない。でも、日本ではみんな学校に通うので、学校が作る人間性に従って、みんなの自我が作られていく。私たちは大学で「個性」について話していますが、本当は大学では遅い。小さいころから、子どもの選

択肢を尊重して、子どもの行動をそのまま支えていけば、もっと伸びやかになるはずなんです。でも、学年が上がるほど揉まれてタブーが増え、どんどんあきらめが増えてしまう。それが問題です。「日本人」としてまとめて管理教育すると、そのように育ってきた人たちには政策が通じやすい。国がわかりやすく早く政治をしたいし、それが通じる国民を育てていきたい。国民の多様性が大事だと言いつつ、それを求めていないんですよ(笑)。国からすると多様性は困るんです。それこそ、60年代のように国民が政府に反発して運動を起こしたことは懲りている。二度とそういう国民を作らない。賢くて反対するよう国民はダメなんですよ。——画一化で抑圧されて育った私たちは大人になってから本当にやりたかった絵画や音楽などを始めました。そういう人へのメッセージをいただけますか？ 私たち、特に、日本では多くの人が一つのことを集中してやり遂げないと成功しないという考えを持っていて、同時進行に不安を感じるし怖いんですよ。でも、私はそうではないと思っています。サブでやっていることが一番身になったり、メインの仕事の支えになったりします。私は日本の企業

のリーダー向けのセミナーで、よくこの話をしますが、日本のリーダー、特に、部長クラスの人は心に余裕がない。趣味をする時間もなく、自分の仕事以外のことができない。でも、仕事から離れてほかに何かをすることで人生が見えてきたり、趣味をすることで新たな能力や感覚が開いていくものです。それによってメインの仕事も別の角度から見ることができたり、さらにクリエイティブになったりするんです。芸術は、なにもないゼロの状態から作り上げていくもの。このアート思考は、すごく大切ですが、アート思考によっていろいろな人と関わりを持ち、行動すると、さまざまな取り組みへの姿勢がよくなり心のやすらぎになる。芸術をするとき、心の奥深いところまで入っていくと、幸せを感じられる。自分と向き合えるのです。左京区には絵を描いたり、音楽をしていたりしている人が本当に多い。アート思考の人がたくさんいます。そういう左京区が持っているポテンシャルには、現代社会で生きるための条件が揃っていると思います。そこを我々は生かしていかなければならない。京都のバイアスもないです(笑)。



『アフリカ人学長、京都修行中』
ウスビ・サコ 著
2021年 文藝春秋 出版
1,400円(税抜)
京都で暮らして30年。空間人類学の視点からの分析はもちろん、サコさんが感じる疑問やツッコミから、「いけず」と言われる京都の客観的視点を楽しめます。読み終えると、なぜか京都人に対して尊敬の念が生まれるのは、京都に代わって、京都の本質や魅力が解説されているからかもしれません。「一見さんお断り」はサービス精神の裏返しなど、解釈の端々にサコさんの愛を感じる一冊です。

日本人が触れない京都に突っ込んだ変な一冊

共感よりも響き合うが重要になってきた



1987年から京都で愛されるハンバーガーショップ「SPEAK EASY」
「ブラックファスト」は最初は11時までだったのが少しずつ延長して17時に。
人気の「京都バーガー」には、豆腐の白和えやしば漬けが入っている
<https://www.speakeasy.gr.jp/>

——私にも20代の娘がいますが失敗を恐れる世代と感じます。失敗談を聞く経験が少ないかもしれせん。そうなんです。あきらかに彼らの時代と、我々の時代は違います。彼らは失敗した後の立ち直り方とか、失敗した後の物事の運び方などのツールを持っていない。成功でしか自分が認められない、受け入れられないと思込んでいます。でも、失敗した私も学者なので本当は大丈夫なんです(笑)。大人のアドバイスって、子どもたちを活かす後押しではなく、抑えようとする人が多い。まさに管理社会。近代化とはこのこと。ルールや規定を作って、行動をいかにコントロールするか。私たちの時代には、管理があっても管理は表に出ていなかった。でも、彼らは管理が先に見えてしまっていて、失敗してはいけないと思うし、チャレンジ精神がなくなる。驚くのが、これ、世界共通なんです。——どんな原因が考えられますか？ デジタルコミュニケーションの手段が豊富になったことが原因でしょうね。お互いの事例が見えてしまう。SNSなど海外のことも他人事ではない。だから、ウクライナの問題でも他人事だとは思ってなくて、自分たちでも考えた

同じ「日本人」にしたほうが管理はしやすくなる 日本の教育は、「日本人」を作るシステム

りする。ある意味、以前より世界が繋がっているし、不安も共有する裾野が広がった。昔は、日本が安全なら安全だと言いきれた。でも、今は、世界が安全かどうかなんです。——インターネットや海外旅行で、コミュニケーションが変化しました。そう、コミュニケーションが変わった。同時代に同時代に、いろいろなことが起こることがわかってきたということ。——管理については、日本の場合、世界大戦時の軍事教育の名残だという説もありますが……。私は、それは直接的な原因ではないと思います。軍事教育の影響がさほどない国でも不安が大きくなっています。われわれの生活に一番近いのが、経済です。第二次世界大戦後、世界は経済発展中心の生活に変わった。私たちは知らない間に、お金にコントロールされているのです。時間、条件、お金など、思考がどんどん経済にシフトしてしまっ。そうすると自分も「管理」に参画しやすくなり、すべての人が管理者になる。消費者になるというところは、そういうことなんです。そこで人は経済という次元で同じような共通項を持ち、だんだん

画一化していく。資本主義諸国が「社会主義はダメ、資本主義は経済という条件を満たされれば幸せになる」と伝え、人々はそれを鵜呑みにする。近代化とは、いかに合理的、機能的にするか。建築もそうですが、同じ基準で作ればいい。世界がそれを求めてきたんです。資本主義の発展とともに、より一元化が進んだ。マーケットが一元化し切ったところで、やっと「不安」が本当に見えてきた。われわれはこのまま進んでいいのかと。結局、オルタナティブ(代案・新しい手法)がないんです。日本のフレーム化教育も、まったく同じです。学校が一つの枠組みで子どもを育てている。学習指導要領という良いはずのものが、どんどん学校を管理し、子どもを管理し、先生を管理し、社会を管理するものになってしま。そうなる。学習指導要領が鬼に見えるてしまいます(笑)。われわれの大学もそうです。文科省が求める評価の枠組みに合わない大学には補助金が出ない。それも経済の論理であり、管理のシステムです。ところが物事が溢れ、限界に来ていて、これまでの神話が壊れつつある。いまの若い人たちは大人が嘘をついていたことに気づいてはなれない。じゃ、何が大事な

左京区の 生き様アート。

一流の芸術家の作品を美術館で鑑賞するのでもいいけれど、歩いていてふとした瞬間に出会うアートに心を動かされるような街にしたい。アートには創る人の生き様が表れる。生き様に一流も二流もないはずだ。人がいて街ができる。アートを通して誰かの生き様を感じる街って面白いと思うのだが、どうだろうか。

Vegetable Artist の NORIKO さんが作る、お皿に野菜で描く作品「野菜礼賛」。季節の野菜を愛でつつ、その形や彩を活かしつつ、どんな風に切って飾ろうかと、野菜に話しかけながらできあがったような優しい作品。他府県の農家さんを訪れたり、取り寄せたりして作ることも。NORIKO さんは岩倉で、同じアパートの人たちと長屋のように助け合いながら楽しく暮らしているそう。山住神社（御旅所）で月一度程度開催される「いわくらプチマルシェ」に行けば会えるかも。
[instagram]
https://www.instagram.com/yasairaisan_kyoto/



野菜への愛と敬意 野菜礼讃



左京変人図鑑 創刊への想い。

左京変人図鑑 編集長 寺嶋 康浩

左京区に住んで今年で9年になる。自然も豊かで山に囲まれており、人々はあたたかく受け入れてくれる。庭にはさまざまな野鳥もやってくる。ここに越してから、近所の貸し農園や裏庭で、畑も始めた。実ったプチトマトや胡瓜は、猿に持っていかれるという体験もした。ままと人のつながりについて、ここでの暮らし始めて、人生で初めて考えるようになった。まちづくり活動の仲間と話をしていて、左京区には変人が多いと聞く。たしかに芸術家や音楽家など個性の多い印象だ。でも、本当に変人が多いのか、実際にどこにいるのか、調べてみたいし、つながってみたい。そして、その魅力を紹介してみたい。変人にスポットを当てたいと思うようになった。二年前に、私は絵を描き始めた。踊ることも絵も、楽しい。生きていくという感覚がある。美術館でみる絵も面白いのだが、私は、街中を歩いていて、ふと出会うような絵があってもいいのではないかなと思う。美術館に向かないと見られない絵だけがアートというのでは、どうなんだろうか。左京なら

街中にアートがあってもいい。誰もがアーティストになればいい。そんな街になれば面白いと思う。変人は、アーティストチック。独自の視点があり、こだわりがある。本人にとっては、こだわっているわけでも、突拍子でもなく、そこになんらかのつながりや法則があったりするだろうと思う。おそらく生き方が、とても人間的で、思考も感性も、どちらもしっかり使いながら行動している人だと思える。

流される人か、変人か。変人とは、自分を持っている人。変人とは、人と違うということ。そこに価値がある。流されることなく自分の軸を持っている。そして、アートはその人が、自分のなかから出てきたものを表現している。表現は誰かを刺激し、また誰かの表現へとつながる。変人を紹介することで、だれかのプレイグスルーになったり、変人スイッチが入ったりして、変人が増殖してく。そんな変人の循環を作りたい。この冊子の目的は、日本全国変人化計画なのかもしれない。

変人は、変わり続ける。変わり続けるから変人なのかもしれない。私たちが変わり続けていく。これを読んでくださっている人が変わり続けるきっかけになればうれしい。

のびのび生きたい人に「変人」の智慧を

左京変人図鑑 副編集長 藤嶋 ひじり

私の故郷は大阪万博の際にできた千里ニュータウン。たくさんの子育て世帯が暮らしており、小学校の生徒数は2千人を超えていました。移住者が多く、私の両親も福井県出身。伝統的なお祭りもなく、地域行事は小学校で開催される盆踊りぐらい。両親は人づきあいが苦手な人で、大勢の他人のなかで生きている感覚でした。母の故郷・小浜に行くと、その田園風景こそが理想郷だと、幼いながら感じていました。母にも許容してもらえない保育士という仕事を経て、言葉が扱う仕事をしてきた。編集者に転身。結婚後、一度は千里を離れたけれど、子育てのために千里に戻りました。15年ほど前、小学館の教育雑誌『edu』の仕事で、ハーブ研究家のベニシアさんの担当となり大原に2年通いました。「こんなところで暮らしたい」と再確認。母が亡くなったのを機に、思い切った引越を決意しました。当時はシングルマザーでしたが、再婚とともに京都に移住したので。最初の結婚が第2の人生とする。左京区は私にとって第3の人生のスタート地。本当はどう生きたかったのか、自己対峙しつつ実践する大切な場となりました。思い返せば、男子とはかり遊ぶ女の子で、将来の夢は、アクションスターか天文学者。青色が大好きで、ショートパンツを履いて、野球帽を被っていたので「変わってる！」と言われ続けてきました。初めて自分の「変人ぶり」を褒められたのが「編集者」という仕事。以来、大勢の方にインタビューをして、世の中にはいろいろな個性を持つ人がたくさんいるのだと知り、変わっていることはコンプレックスではなくになりました。

変人。この言葉は、いまは褒め言葉と解釈しています。世間一般の常識に囚われることなく、自分の魂の意思を軸として生きる変人は、眼がキラキラ輝いています。私たちは、もっと自由に、自分の心がワクワクすることをしながら生きてもいいはず。そんな人が増えたら世の中も楽しいものに変わるのでないでしょうか。

山に囲まれ、鳥や鹿の音が聴こえるこの左京の地で、人生で初めて地域に愛着が湧き、まちづくり活動「左京朝カフェ」に関わりました。そこでも素敵な変人たちに出会えました。左京に多く存在する、そんな魅力的な人を紹介したく、かつ、会いたくて(笑)、この『左京変人図鑑』を創刊しました。のびのびと生きる、生きたい、すべての方にお届けすべく、楽しく発行していきます。どうぞよろしくお願ひします。

こっそり教えたい 左京自然スポット。



京都市東北部クリーンセンター近く、市原バイパスの少し南側に、鞍馬川が流れている。Google マップで見ると、「第2公園」という場所があるが、その近くから川に降りることができるようになっている。河原では、親子で川遊びする人はもちろん、アフリカの伝統楽器「ムビラ」を奏でる人、みんなで歌っている人など、時折、アーティストが集っているのを見かける。川が流れる音、鳥の声、そして、優しいムビラ

の音色が合わさるのを聴いていると、心身がどんどん解放されてリラックスしていく。橋の上から眺めていると、真っ青な背中の野鳥（おそらくオオルリ）が飛んでいくのが見えることも。川は砂ではなく小石だらけなので、マリンシューズなどがあるほうが川遊びが楽しめる。川は少し深くなっている場所もあるので、子連れの方などは注意して。座標：35° 05'13.2"N 135° 45'06.7"E (← google で検索)

左京変人図鑑編集部からのお知らせ



一緒に鞍馬川の清掃活動しませんか？

左京変人図鑑編集部では、鞍馬川の清掃活動を月に一回開催しています。毎年6月には蛍が飛来して一見綺麗に見える鞍馬川ですが、プラスチックのゴミや空き缶、タバコの吸い殻から家電などの粗大ゴミまで捨てられています。川遊びをしながら、無理なく楽しんで一緒に清掃活動をしてくれる仲間を募集しています。詳しくは左京変人図鑑のwebサイトをご覧ください。

『左京変人図鑑』は広告ページのない冊子です

私たちは「広告のないフリーペーパー」を作るという試みに挑戦しています。できる限り中立でフラットな状態で情報発信していきたいのです。そして、この考えに賛同してくださる方からの、制作費用への協賛については大歓迎いたします。ご希望の場合、誌面にお名前を掲載いたします。

『左京変人図鑑』の設置場所を募集中です

『左京変人図鑑』を読んで「うちに置きたい」と思っていただけの方は、ぜひ、ご連絡ください。左京区外でも構いません。「なんだかおもしろそう!」「変人さん大好き!」という方がいらっしゃるような場所に、ぜひとも置いていただければ幸いです。



編集長：寺嶋康浩

左京区在住。デザイナー、コピーライター、ボディワーカー、ダンサー、画家、電磁波環境測定対策士、第二種電気工事士。市民団体「みんなで作る 左京朝カフェ」のスタッフ。鞍馬川のゴミ拾い活動や目的なくゆるりと人と繋がる場づくり「ゆるりつながるカフェ」を月一開催中。

副編集長：藤嶋ひじり

左京区在住。編集者、シンガーソングライター、FM87.0 RADIO MIX KYOTO 旅行ライター、All About コラムニスト、認定心理士、保育士。(株)リクルート『とらば一ゆ』編集者を経て、日経BP社、小学館、NHK 出版などで取材・執筆。インタビュー実績1,900人。3姉妹の母。



後援：みんなで作る左京朝カフェ 協賛：猫猫寺開運ミュージアム、北風と太陽 取材協力：京都精華大学 前学長 博士(工学)ウズビサコ氏

左京変人図鑑の協賛や配布して下さる企業、団体、個人を募集しています。詳しくは以下のwebサイトからご連絡ください。

<https://henjin-zukan.net>

